

月刊

地域保健

11
2012

●特集

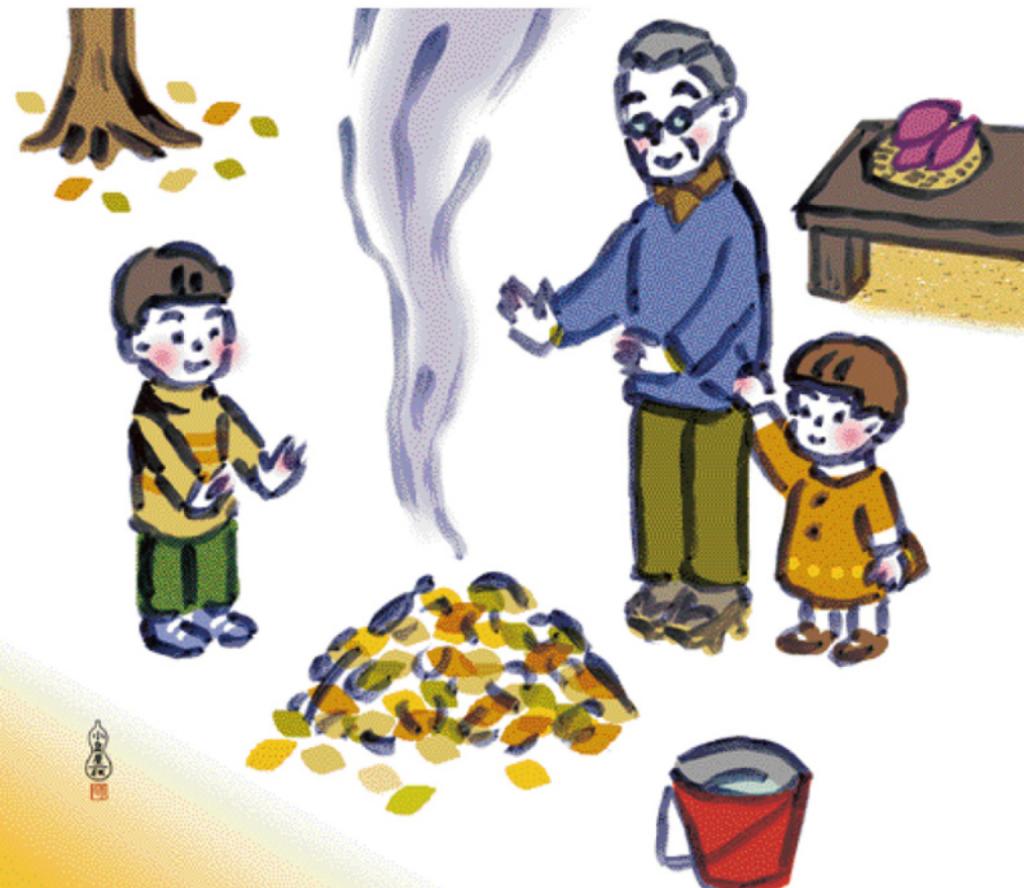
健康日本21(第2次)を上手に生かす

●フロントランナー

岩見喜久子さん 《安来市役所健康福祉部高齢者安心課主査》

●ピープル

坂爪真吾さん 《一般社団法人ホワイトハンズ代表》



岩見喜久子さん

安来市健康福祉部高齢者安心課主査（統括保健師）

現場に入り、ブれない保健師活動を

伝承すべき保健師のコアとは

島根県安来市

島根県の東端に位置する安来市。安来といえば安来節が思い浮かぶが、実は神話の里でもある。神代にはヤマタノオロチを退治したスサノオノミコトが治めた地域とされ、地名のヤスギはこの地にこられたスサノオノミコトが「吾が御心は安平（やす）けくなりぬ」といわれたことから「安来（やすぎ）」と呼ぶようになつたと伝えられる（『出雲風土記』）。

また、古代から「たら製鉄」という製鉄法が盛んな地域であり、日本刀の材料となる玉鋼（たまねがね）の積出港として栄えた町でもある。鋼づくりの伝統はその後、日立金属に引き継がれ、カミソリの刃などに使われる特殊鋼のヤスギハガネは、世界でも大きなシェアを占める。ちなみに、「たら製鉄」とは、足でたらたら（ふいご）を踏んで風を送り込む製法。勢い余つて空足を踏む「たらを踏む」という表現はここからきている。

島根県の素晴らしい実習

岩見さんは、合併前の旧伯太町の出身。社会科の教員を目指していたが、高校2年のとき母親が結核で入院した

ことで、病気予防の大切さを痛感。そのときに町の保健師のはつらつと働く姿を見て、保健師になる決意を固めた。米子の国立病院の付属看護学校を経て、県立保健婦専門学校に進学。印象に残っているのは実習だという。

安来市広瀬町舎に行くには、米子空港から安来道路を抜け、県道45号を飯梨川沿いに南下する。

このあたりを流れる8本の河川は飯梨川も含め、ヤマタノオロチにちなみ「オロチ河川群」と呼ぶそうだが、そんなおどろおどろしい響きには似つかわしくない、穏やかな清流である。広瀬町舎に着くと、岩見さんが待つていた。茶色の上下の清楚な装い。白色で切れ長の目、軽い巻き髪。神話に登場しそうな人である。

「島根県の保健師教育は実践的で、実習地の保健師や保健所と一緒に健診、調査、健診結果を踏まえた報告会、健康教室、訪問活動などを1年間かけて徹底的にやります。乳児訪問でも一人の子を受け持ち、複数回訪問して子どもの成長をみます。保健師と同じような仕事を学生時代から経験し、理論と実践を平行して学んでいくので卒業後に市町村や保健所に入つても、違和感がないのです」

今月のフロントランナーは、神話と歴史のふるさと、安来市の岩見喜久子さんだ。

米子の国立病院の付属看護学校を経て、県立保健婦専門学校に進学。印象に残っているのは実習だという。

実習先は、能義保健所と地元ともいえる旧安来市だった。当時は3歳児健



健康日本21（第2次）は、健康格差に注目し、健康や疾病の社会環境要因を重視しているのが特徴だ。かつての国民健康づくり運動とは違い、健康や疾病の自己責任論が後退し、環境面から人々の健康を支えていくこうとする姿勢を前面に打ち出している点は、公衆衛生本来の姿勢に立ち返ったともいえ、保健師の地域づくりとも重なる。

特集はインタビューと対談で構成する。インタビューでは、全国保健師長会の今野弘美さん（健康日本21推進に関する特別委員）に第2次計画を保健師がどう読み解くかについて聞く。対談では、第2次計画の策定専門委員会座長の辻一郎さんと同委員の津下一代さんに第2次に盛り込んだ思いを中心に語っていただく。

《対談》

P24 健康日本21（第2次）が目指すもの

◎辻 一郎さん（次期国民健康づくり運動プラン策定専門委員会座長、東北大学大学院医学系研究科）
◎津下一代さん（同委員会委員、あいち健康の森健康科学総合センター）



健康日本21（第2次） を上手に生かす

新しい時代の
新しい健康観
を読む

《インタビュー》保健師としてどう読み解くか

P18 地域全体をとらえ直す絶好の機会に

◎今野弘美さん（全国保健師長会健康日本21推進に関する特別委員、さいたま市保健福祉局）



「住民の顔を見ただけで 住基データが 浮かぶくらいになりたい」

人をどこまでもみていける保健師は理想の仕事

はらだ あやりさ
原田亜梨沙さん

●板柳町健康福祉課



◆しとやかさのなかに
強い意思を持つ原田
さん

◎文・写真
西内義雄
(医療・保健
ジャーナリスト)

「保健師になりたい一心で、岩手から参りました」
ひよこ保健師の取材候補者を何げなく探していたある日、青森県北津軽郡板柳町広報紙の新採用職員紹介コロニーにこんな文字を見つけて。地方に行くほど求人が少ないといわれる保健師だけにその言葉の意味は容易に想像がついた。きっとこの人は「私は絶対保健師になるんだ!」との強い意気込みで、見ず知らずの町に飛び込んで行つたのだろう。そんなことを考えていたら無性に会いたくなつた。

青森空港から約1時間。板柳町にはたくさんのリング畑があつた。日本

の周辺にはリング畑をかたどつたオブジエがいくつもある。

会いたかった人は、今年3年目を迎える健康福祉課の原田亜梨沙さんだ。

電話やメールのやり取りのときから

原田さんの出身地は秋田県鹿角市。父親がJ.R職員のため転勤が多く、秋田や岩手など数カ所での生活を体験している。板柳町に来る前は岩手県の矢巾町に両親とともに暮らしていた。6

**思わず「はい」と
答えていた**

「大学は出たいと思っていたので、高校は進学校へとの思いがありました」というように、盛岡の県立進学校に入学。取りあえず大学を目指そう。具体的なことはそれまでに決めようと考えた。途中から分かれる文系と理系コースは、理系を選んだ。将来のこと

しつかりした応対のできる人だと感じていたが、第一印象もその通り、24歳とは思えぬ落ち着きを感じる。感心したのは名刺に可愛いリンゴのイラストが印刷されていたことだ。先輩たちとちょっと違うデザインだったので聞くと「自分で作りました」と明るく笑っている。名刺で仕事するなどはよく聞く言葉だけど、工夫して、自分を覚えてもらうためのツールとして活用することは、どんな職業でも大切なこと。

顔と名前を覚えてもらう仕事ならなおさらのことなので、全国的に真似していただきたいことである。

「でも、ここで根性を身につけ、友達も見つけたと思います!」

明るく話す。厳しいながらも充実した部活だったようだ。一方、勉強については

「大学は出たいと思っていたので、高校は進学校へとの思いがありました」というように、盛岡の県立進学校に入学。取りあえず大学を目指そう。具体的なことはそれまでに決めようと考えた。途中から分かれる文系と理系